

アメリカ英語の弱化母音削除について

高橋 幸雄

Reduced Vowel Deletion in American English

Yukio TAKAHASHI

はじめに

本論では、主に Kenyon & Knott (1944) の例をもとに、アメリカ英語における弱化母音削除の現象についての検討を行い、この現象を扱う規則の体系について考察する。¹⁾

Kiparsky (1977) は (1a) の例においては弱化母音の脱落がみられ、そのような事実は(2)のような規則により説明できると仮定している。²⁾ Kenyon & Knott (1944) から例を付け加えるならば、(1b) では語頭から2番目の音節の弱化母音の削除は許されない。

- (1) a. victory, imagery, lingering, asterisk, catholic, sickening, venomous
b. pathologic, misanthrope, cataract
(2) $V^* \rightarrow \emptyset / VC_1 \text{---} [+son] V^*$ (optional; V^* = unstressed vowel)

(2)は語の内部において適用され、該当する弱化母音を随意的に削除する規則である。さらに例を付け加えれば、(2)の規則は(3a)にみられるような分詞形の語の、-ingの左側にある音節の弱化母音の極めて首尾一貫した振舞いを説明することができるかもしれない。

- (3) a. janitoring, charactering, monitoring, registering, carpentering, cylindering, ministering
b. i. [monetəriŋ] (4音節語)
ii. [monetriŋ] (3音節語)

(3a)の例は全て、(3b)において monitoring を例にして示したような、4音節語の発音と3音節語の発音とを持っている。(2)の弱化母音削除規則の環境指定の左端のVは強勢母音及び無強勢母音の両者を指しうる。このような事実の説明のために、強勢を持つ音節から弱化母音を持つ音節を一つ隔てた位置にある音節の弱化母音が削除される場合もあると仮定し、(2)を(4a)に改訂することも可能かもしれない。

- (4) a. $V^* \rightarrow \emptyset / VC_1 (V^* C_1) \text{---} [+son] V^*$
b. i. $V^* \rightarrow \emptyset / VC_1 V^* C_1 \text{---} [+son] V^*$
ii. $V^* \rightarrow \emptyset / VC_1 \text{---} [+son] V^*$

しかしこれは受け入れがたい仮定である。なぜならば、(4a)の規則が(4b)の二つの下位規則か

らなるのにも拘らず、そのうちの片方の下位規則が極めて首尾一貫した形で、-ing 形の語の発音上の異形を派生し、他方、もう一つの下位規則はその構造記述が満たされていても何ら構造変化をもたらさない場合がかなりあるからである。この点についてさらに具体的に考えるために、まず -ing 形の語の振舞いについて言うならば、Kenyon & Knott (1944) が挙げている -ing 形の語においてはその接辞に隣接する位置で、例外なしに(5)に要約したような発音上の異形が認められる。

(5) a. 音節主音的共鳴音 \longleftrightarrow 非音節主音的共鳴音

enlightening, loudening, bedeviling, libeling, handling, sprinkling, blazoning, moistening

たとえば、[lawdnɪŋ] \longleftrightarrow [lawdnɪŋ]

b. 弱化母音 + 非音節主音的共鳴音 \longleftrightarrow 非音節主音的共鳴音

cautioning, deafening, deepening, enlivening, darkening, busheling, lengthening, smoothening, previsioning, hindering, clapping, blubbing, bickering, angering, factoring, offering, hovering, bothering, ushering, measuring, butchering, badgering, hammering, honoring

たとえば、[blabərɪŋ] \longleftrightarrow [blabrɪŋ]

すなわち、(5a) に挙げた語においてはその接辞の左側の音節には弱化母音が一つの独立した分節音として音声的に現れず、その発音上の異形が共鳴音の音節主音性の随意性として現れ、他方、(5b) に挙げた語においてはその接辞の左隣の共鳴音の音節主音化は起こらず、その代わりに、その発音上の異形は弱化母音の音声的な具現、非具現という形で現れる。このような発音上の異形は -ing 形の語以外の語においても、確かに見出されるが、しかしながら、(3)と(5)の -ing 形の語の場合とは異なり、必ずしも一貫した形で(5)のような異形がみられるわけではない。たとえば、Kenyon & Knott (1944) から例をひき、弱化母音の具現、非具現について考えてみた場合、(6a) の語では -able 形の語の場合には末尾から第3番目の音節において、そして、それ以外の語では末尾から第2番目の音節において、弱化母音の削除は随意的に可能であるが、(6b) の語では弱化母音の削除は起こってはいない。

(6) a. venomous, frivolous, general, battery, reverie, abominable,

b. ravenous, literal, sideral, lottery, accelerable

c. stapling, gambling, bogging

d. miracling, principling, bicycling, articling, chronicling, parabling, syllabbling, curricling, tricycling, manacling

このように、(4)の規則は(3)の例について首尾一貫した形でその発音上の異形を派生する一方で、(6a, b) のような場合には、その構造記述が満たされても必ずしも構造変化をもたらさないことがあると仮定しなければならなくなる。³⁾また、Hooper (1978) は (6c) のような語においてはその弱化母音が音声的に具現しないような発音も可能であるということを弱化母音の脱落によるものとして説明しているが、このような説明方法をとる場合 (6d) の例もまた、(4)の規則では扱いきれない例となる。(6d) では (6c) と同様に、-ing の左側に隣接して生ずる共鳴音の非音節主音的な発音と音節主音的な発音とが可能である。

このような -ing 形の語の振舞いは、Mohanani (1982) 及び Mohanani (1986) が提案する音韻

論の枠組みの中でより自然に説明されるように思われる。本論では、より自然な説明は(2)を(4)に改訂することに求められるべきではなく、むしろ、(2)のように随意的に適用され、そのような音声環境の下で弱化母音を削除する規則を認めつつも、独立に動機づけられる母音挿入の過程との関連において、その解決が求められるべきであるということを論じていく。

1. アメリカ英語の共鳴音の音節主音化について

まず最初にアメリカ英語における共鳴音の音節主音化の一般化の可能性について考えることにする。Kenyon & Knott (1944) は「弱化母音+共鳴音」という音連鎖と「音節主音的共鳴音」との間の交替について以下のような観察を行っており、これは上に挙げた例の弱化母音削除の検討において重要な示唆を与えるものである。すなわち、そこでは(7a)に挙げた語においては語末の共鳴音は、その形式ばった発音においては、たとえば(7c)に示したようにその左隣に弱化母音を伴ったものとして現れるが、通常の口語的な発音では調音上の理由から弱化母音は表面にそのままでは現れず、その代り(7b)に示したとおりその共鳴音は音節主音として現れるということが指摘されている。⁴⁾

- (7) a. Eden, button, cradle, lessen, apple, reason
 b. [iydŋ], [bʌtŋ], [kreydɪ], [ləsŋ], [æp], [riyzŋ]
 c. [iydən], [bʌtən], [kreydəl], [ləsən], [æpəl], [riyzən]

しかし、(7b)のような音節主音化は特定の音声環境に限定されている。以降の(8)から(17)の例をみていくなれば、語末の音節ではその弱化母音の左側に生ずる特定の分節音のみがそのライムの共鳴音の音節主音化を許容することが分かる。さらにこのような語末での音節主音化の可能性は語中においても同様の制限を受けているように思われる。Kenyon & Knott (1944) から他の例を加えてみると、(7a)と同じ語末の位置であっても(8)と(9)の例では共鳴音の/l/と/n/の音節主音化は認められず、その代わりに、その共鳴音の左側には弱化母音が具現しているということが分る(それぞれの項目の右側の/…/は該当する弱化母音の左側に隣接して生じている分節音を指す)。

- (8) a. lethal, azimuthal, bismuthal /θ/
 b. bequeathal, betrothal /ð/
 c. potential, especial, sequential /ʃ/
 d. usual /z/
 e. switchel, satchel, hatchel /tʃ/
 f. evangel, angel, agile /dʒ/
 g. moral, temporal, general /r/
 (9) a. sharpen, dampen, steepen /p/
 b. carbon, ribbon, turban /b/
 c. quicken, reckon, token /k/
 d. wagon, dragon, flagon /g/
 e. soften, stiffen, roughen /f/
 f. haven, eleven, contrivance /v/
 g. strengthen, lengthen, anacoluthon /θ/

h. smoothen, heathen	/ð/
i. mention, obsession, section	/ʃ/
j. occasion, decision, persuasion	/ʒ/
k. question, puncheon, fortune	/tʃ/
l. region, pigeon, surgeon	/dʒ/
m. demon, lemon, formant	/m/
n. canon, tenon, pennon	/n/
o. hexahemeron, patron, decahedron	/r/
p. gallon, melon, colon	/l/

さらに、Kenyon & Knott (1944) が提出している例を付け加えるならば、次の(10)と(11)の場合には語末の音節の共鳴音の音節主音化が認められ、弱化母音は音節中では音声的に単独の分節音としては現れてはいない。⁵⁾

(10) a. opal, chapel, episcopal	/p/
b. tribal, cannibal	/b/
c. local, focal, academical	/k/
d. centrifugal, legal, laryngal	/g/
e. metal, orbital, recital	/t/
f. feudal, alkaloidal, tidal	/d/
g. abyssal, basal, dismissal	/s/
h. phrasal, causal, disposal	/z/
i. triumphal, nymphal, offal	/f/
j. adjectival, medieval, removal	/v/
k. primal, caramel, decimal	/m/
l. final, journal, flannel	/n/
m. monophthongal, diphthongal	/ŋ/
(11) a. cotton, flatten, admittance	/t/
b. guidance, credence, widen	/d/
c. absence, decent, moisten	/s/
d. citizen, peasant, season	/z/

他方、(12)に例を挙げてあるように、/r/の場合にはいずれの子音であっても、語末の位置での音節主音化が認められる。⁶⁾

(12) a. water, monitor, martyr	/t/
b. embroider, shudder, ladder	/d/
c. broker, flicker, bicker	/k/
d. auger, tiger, stagger	/g/
e. clapper, sandpaper, supper	/p/
f. neighbor, saber, sober	/b/
g. differ, suffer, offer	/f/

h.	deliver, favor, recover	/v/
i.	denature, butcher, picture	/tʃ/
j.	endanger, badger	/dʒ/
k.	author, lather	/θ/
l.	brother, feather, wither	/ð/
m.	glimmer, hammer, farmer	/m/
n.	honor, listener, tenor	/n/
o.	singer, hanger	/ŋ/
p.	measure, treasure, erasure	/ʒ/
q.	usher, censure, fisher	/ʃ/
r.	eraser, predecessor	/s/
s.	scissor, vizor, buzzard	/z/
t.	treasurer, mirror, emperor	/r/
u.	counselor, parlor, burglar	/l/

(8)から(12)の例をもとに共鳴音の/n/、/l/及び/r/の音節主音化の可能性を要約すると、(13)のような一覧表が得られる。(13)では、その横の列は弱化母音の右側の共鳴音を指し、縦の列は弱化母音の左側の子音を指している。それぞれが交差する位置にOKの指定があるものは共鳴音の音節主音化が可能である場合を表し、その位置にアスタリスクの指定のあるものは共鳴音の音節主音化が起こらず、弱化母音はその該当する位置に生ずることを表す。⁷⁾

(13)	n	l	r
p	*	OK	OK
b	*	OK	OK
k	*	OK	OK
g	*	OK	OK
t	OK	OK	OK
d	OK	OK	OK
s	OK	OK	OK
z	OK	OK	OK
f	*	OK	OK
v	*	OK	OK
θ	*	*	OK
ð	*	*	OK
ʃ	*	*	OK
ʒ	*	*	OK
tʃ	*	*	OK
dʒ	*	*	OK
m	*	OK	OK
n	*	OK	OK
ŋ		OK	OK
r	*	*	OK
l	*		OK

空欄は該当する例が見出されないことを表す。

次に(13)の一般化が語中においてどのように成り立つかについて考えてみたいと思う。(14)に挙げた例から分るように、(2)の規則の構造記述に合致する例では、強勢を持つ音節の右側の位置で随意的に共鳴音の音節主音化あるいは弱化母音の随意的な具現化が観察される。

- (14) a. 音節主音的/n/ ↔ 非音節主音的/n/
arsenal, personal, arsenic, impersonal, insubordinate, laudanum, ordinance, personable, personage
たとえば、[ɔrdnəns] ↔ [ɔrdnəns]
- b. 弱化母音+非音節主音的/n/ ↔ 非音節主音的/n/
actionable, conditional, covenant, covenanter, Daubeney, exceptionable, fashionable, abominable, accompaniment, accompanist, company
たとえば、[ækfənəb] ↔ [ækfnəb]
- c. 音節主音的/l/ ↔ 非音節主音的/l/
scandalous, Nicholas, traveler, monopoly, reveler
たとえば、[skændləs] ↔ [skændləs]
- d. 弱化母音+非音節主音的/l/ ↔ 非音節主音的/l/
bachelor, catholic
たとえば、[bætʃələ] ↔ [bætʃlə]
- e. 弱化母音+非音節主音的/r/ ↔ 非音節主音的/r/
slippery, deliberate, anchoress, tigerish, factory, shuddery, tracery, miserable, reference, livery, smithery, furtherance, slapdashery, treasurer, natural, imagery, numerous, generous, tolerance
たとえば、[slipəri] ↔ [slipri]

(14a,c) では、発音上の異形は共鳴音の音節主音化の可能性という形で現れ、(14b,d,e) では発音上の異形は弱化母音の具現および非具現という形で現れている。

これらの例の音節主音性と弱化母音の具現の随意性は(2)の規則が随意的に適用されるためであると考えてもよいかもしれない。実際、次の(15a,c)に挙げた例は(2)の規則の構造記述に合致しているにも拘らず、該当する共鳴音(/n/と/l/)の音節主音化のみが観察され、さらにこれらの例の語中の共鳴音が音節主音化される可能性は(13)に要約した語末の位置の共鳴音の音節主音化に関する一般化に合致している。このことはその強勢を持った音節の右側の位置の音節に、Kenyon & Knott (1944) が観察しているような弱化母音が残存していることを表すものであると思われる。

- (15) a. 音節主音的/n/
Chesaning, coparcener, impertinence, in-co-ordinate, litany, monotony, ordinal, pulchritudinous, seasonal
たとえば、[litni]
- b. 弱化母音+非音節主音的/n/
balcony, carbonate (名詞), ravenous, saponin, telephony, Anthony, impassionate, fortunate, coreligionist, conterminous, canoness, agony, coroner, milliner
たとえば、[bælkəni]

c. 音節主音的/l/

chrysalid, adrenalin, assimilable, Attala, cartilage, catalyst, libelous, monometalist, monopolist, paternalist, pestilence, legalist, medalist, medievalist, syphilis

たとえば、[mɛd|lɪst]

d. 弱化母音+非音節主音的/l/

atheling, flatulence, modulus, moralist

たとえば、[æθə|lɪŋ]

さらに、(15b,d) の例のように(13)においてアスタリスクの記号を付してある分節音（すなわち、語末の位置で共鳴音の音節主音化を許容しない分節音）が共鳴音と共に語中で弱化母音を狭んで存在する場合には、その共鳴音の音節主音化は起こらず、弱化母音はその該当する位置に具現している。

次に(2)の規則の構造記述に適合しない場合について考えてみる。このような場合には、(16)に挙げた通り、(13)の中で共鳴音の音節主音化を許す全ての子音について、関連する例が Kenyon & Knott (1944) の中に見出される限りにおいて、その共鳴音が音節主音として生じている。

(16) a. 音節主音的/n/

absentee, presentation, patentee, ordination

たとえば、[æbsɛnti|j]

b. 音節主音的/l/

capillary, assibilate, localize, legalize, catalogue, edelweiss, miscellaneous, resolution, buffalo, cavalcade, anomalistic, analytical

たとえば、[bʌflə|j]

c. 音節主音的/r/

opportunity, yesterday, underlie, dissertation, conversation, enervation, property, liberty, lethargy, poverty, energy, allergy

たとえば、[prɒpɔ|j]

(16)の例ではさらに、その当該の共鳴音が非音節主音的な発音は認められない。(*[æbsɛnti|j], *[bʌflə|j], *[prɒpɔ|j]) (17)に挙げた語は(2)の弱化母音削除規則の構造記述を満たさず、かつ、その語末の弱化母音の左側には、その共鳴音の音節主音化を許容しない分節音が生じている。このような場合には、Kenyon & Knott (1944) の中に見出される全ての例にわたって、共鳴音の音節主音化は行われず、弱化母音はその共鳴音の左側に必ず生じている。

(17) a. 非音節主音的/n/

saponaceous, Sabinal, Americanize, organize, hyphenate, rejuvenate, athanasia, heathe-
nesse, revolutionize, visionary, questionnaire, aborigine, financier, ammonite, baronet,
colonnade

たとえば、[sæpəneɪfəs]

b. 非音節主音的/l/

pathologic, specialize, capitulate, evangelistic, horologe, philologic

たとえば、[pæθələdʒɪk]

c. 非音節主音的/r/

operate, liberation, anchorite, Margarita, alteration, falderal, evisceration, azorite, aphorism, adoration, authorize, leatherette, Fletcherite, plagiarize, humoresque, generation, terrorize, accelerate

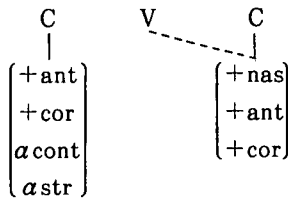
たとえば、[libəreyʃən]

既に明らかな通り、(17)の例では今問題としている共鳴音の左側に隣接した位置に弱化母音が具現しない発音は認められない。(*[sæpneyʃəs], *[pæθlɔdʒɪk], *[libreyʃən])

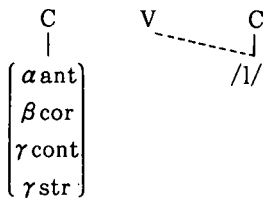
(14)から(17)において挙げた例は、共鳴音の音節主音化が、(13)に要約した制限に加えてさらに次のような制限を受けていることを表している。すなわち、共鳴音が音節主音化されるためには、基底のレベルにおいて、その共鳴音の左側に隣接して弱化母音が存在しなければならない。そしてこれは、弱化母音の脱落と共鳴音の音節主音化が互いに独立した過程であることを示唆している。

そこでこのような音節主音化の事実を説明するために Clements & Keyser (1983) の音節理論に基づき、(18)のような規則を仮定したいと思う。⁹⁾ここで採用している素性の体系は Halle & Clements (1983) からのものである。また Halle & Mohanan (1985) に従い、弱化母音は基底においてはメロディーを持たない空のタイミングスロットであり、そのままメロディーに結び付けられないままである場合には、後の過程において弱化母音のメロディーが充当されると仮定する。

(18) a. /n/の連結規則

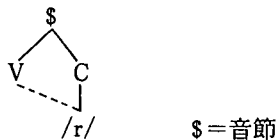


b. /l/の連結規則



もし $\beta = +$ ならば、 $\alpha = +$

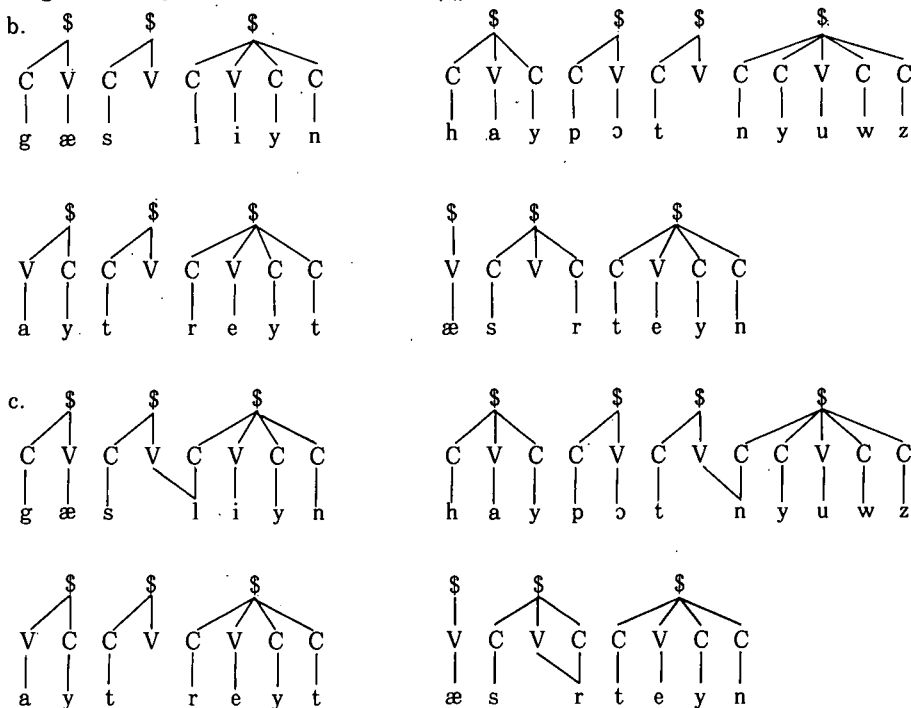
c. /r/の連結規則



/r/に関する連結規則が適用される環境は、(18c) に示した通り、(16c) と (17c) の/r/の振舞い

の違いを説明するために、音節のライムに限定されなくてはならない。⁹⁾(18)の規則の適用について具体例を挙げておく。たとえば、(19a)の語はこのような連結規則により、(19b)のような音節構造を持つものから(19c)に示したような音節構造を持つものへと派生過程を辿る。

(19) a. gasoline, hypotenuse, iterate, ascertain



Halle & Mohanan (1985) の適用領域指定の原則 (principles of domain assignment) により、これらの連結規則は層5において適用されると仮定することができる。というのも、(20)に挙げてあるように、これらの規則は斜字体によって示したような語と語とに跨った特定の音声的環境においても適用され、またこれまでに挙げた例においても、これらの規則が語彙部門の層1から層4のいずれかの層に限定された形で適用されることを裏付ける証拠は見当たらないように思われるからである。¹⁰⁾

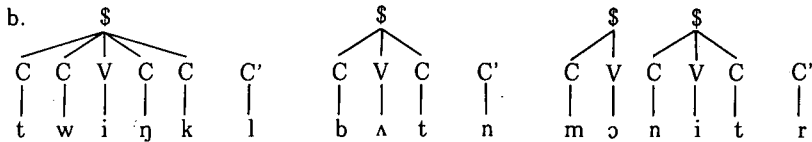
- (20) a. ... and is *inhabited* ...
 ... *right in the middle* ...
 b. ... has *a little bit* ...
 ... we went *in a little* restaurant

(20a)は/n/の音節主音化の例であり、他方(20b)は/l/の音節主音化の例である。これらの例に対応し、さらに本論の考察に関連するような/r/の音節主音化の例は体系的に存在しない。というのも、そのような例は「…弱化母音##r+子音…」(##は語境界)という形式を持つ音韻上の連鎖を含むものでなければならず、英語には「r+子音」という語頭子音結合群を持つ語は存在しないからである。

2. V要素挿入およびV要素削除

この節では語末の音節が「真子音+共鳴音」という音連鎖から成る語の音節構造の付与および弱化母音の削除を行う規則の定式化について考察する。Clements & Keyser (1983) の音節理論においては (21a) の語の核音節構造 (core syllable structure) は (21b) のように書き表すことができる。

(21) a. twinkle, button, monitor



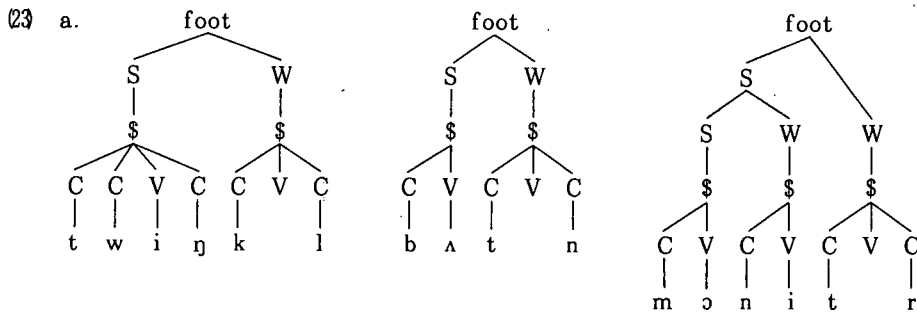
C' = 音節外的分節音

Clements & Keyser (1983) では子音の音節外音性 (extrasyllabicity) は極めて重要な意味を持っており、音声的にはこのような音はそれに隣接する音節から短い中立母音によって分離された形で具現化されるということが指摘されている。Clements & Keyser (1983) の Klamath 語の分析と同じように、ここでは、(22) のような V 要素挿入の規則により V 要素が挿入されると仮定する。またこのようにして挿入された V 要素は Hayes (1982) が提案する規約、漂遊音節接合 (stray syllable adjunction) により隣接する韻脚 (foot) に W として結び付けられると仮定する。

(22) V要素挿入規則 (層2: 義務的)

$$\phi \longrightarrow V/C-C'$$

したがって、V要素挿入の後には Clements & Keyser (1983) が提案する再分節化規約により (21b) は (23a) のような音節構造へと派生されることになる。



b. deckle-edged, double-edged, middle-aged

c. afterimage, alter ego, water-inch

このV要素挿入は層3の前において行われなくてはならない。というのも (23b,c) のような場合には、複合語の第2要素が母音で始まる場合にもその第1要素の末尾の共鳴音は音節主音化されるからであり、さらに、そのままV要素が挿入されない場合には再分節化規約により層3において

/l/及び/r/はその複合語の第2要素の冒頭の音節のオンセットとなって音節外的な音でなくなり、そのために、V要素挿入の対象とはならなくなるからである。したがって、ここでは、Halle & Mohanan (1985) の適用領域指定の原則により、(22)は層2において適用されると仮定する。さらに、(22)は本論の分析の枠組みでは義務的に適用される規則であるとみなす必要がある。というのも仮にこの規則が随意的であると考えた場合には、語中と語末における共鳴音の音節主音化の事実を適切には説明できなくなるからである。たとえば、hypotenuseとbuttonの/n/について言えば、両者とも音節主音的な共鳴音として具現している。(22)がbuttonの音節外音的な/n/の左どなりにVを挿入しないような派生をも認めるならば、buttonの語末の/n/の音節主音性は、特別な方法を用いないかぎり説明されえない事実となってしまう。たとえば、SPEのように共鳴音音節主音化規則(共鳴音→音節主音的/子音—#)を認め、buttonの語末の/n/の音節主音性を説明することができたとしても、hypotenuseの語中の/n/の音節主音性は説明されないままに、あるいはbuttonの/n/とは別の種類のものとして、扱わなければならない。というのもhypotenuseの-useの左隣に形態論的な境界を仮定することには、何等納得ゆく証拠はないからである。

アメリカ英語においては、語中での/r/の再分節化にたいしてさらに、次に述べるような制限が与えられているように思われる。次の(24a)では、over-, under-, super-, hyper-, inter-の末尾の/r/は音節主音化されてはいるけれども、(24b)ではその/r/は音節主音化されず、その左側には弱化母音が生じている。

- (24) a. i. overact, over-all, overanxious, overawe, overeat, overemphasis, overemphasize
overestimate
ii. underact, underage, underestimate, underestimation, underofficer
iii. superadd, superannuate, superannuation, superego, supereminent, superimposition
iv. hyperacid
v. interact, interoceanic
b. i. overexcite, overexert, overexertion, overexpose, overindulge
ii. underexpose
iii. superabound, superabundance, superimpose, superincumbent, superinduce, superintend
iv. hyperacidity

このような事実はこの分析の枠組みでは、再分節化に対し次のような制限を課することによって、最も直接的に説明することができよう。

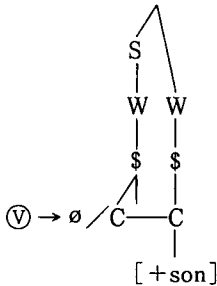
- (25) 韻脚構造においてSを付与されている音節へは再分節の操作が加えられない。

(25)より(24a)の形態素の末尾の/r/がその右側の音節のオンセットへと再分節されることが阻まれる。(24b)ではその/r/の右側は無強勢の音節であるため、(25)の制限によりその再分節化が阻まれるということではなく、/r/はその無強勢音節のオンセットとなる。実際、(23a)のafterimageでは/r/は音節主音化されるが、aftereffectではその音節主音化は認められない。

次に弱化母音の削除を行う規則について考えてみる。(19)の例は全て複数個の韻脚からなり、それぞれの韻脚は1個あるいは2個の音節から成り立っている。これらとは対照的に(14)に挙げた例は3個以上の音節から成る韻脚を持っており、これらの例においてKiparsky (1977)が考えている

ような弱化母音削除が行われると推測される。Hayes (1982) の韻脚の概念を用い、さらに、Clements & Keyser (1981) と同じように弱化母音の脱落はV要素の削除として説明されると考えるならば、ここでは②6のような、メロディー（分節音の連鎖）に結び付けられる対応線を持たないV要素を削除する規則を設定することができる（Ⓧはメロディーに結び付けられる対応線を持たないV要素を指す）。

②6 V要素削除規則（層5：随意的）

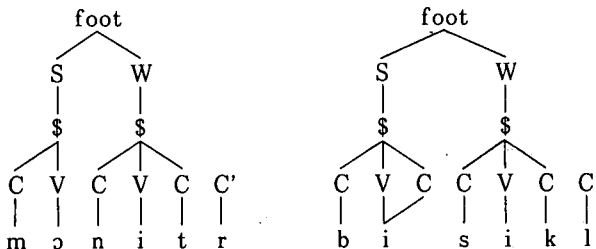


(14)から(17)の例において示されているように、語中の共鳴音の音節主音化を説明する連結規則(18)はV要素削除規則②6と吸血関係（bleeding relationship）にあると仮定する場合にさまざまな例の弱化母音の具現と共鳴音の音節主音化とを説明することができるので、この②6の規則は(18)の前に順序づけられなければならないと思われる。また連結規則(18)とV要素削除規則②6の中で指定されている環境は層5においても得られるので、本論では Halle & Mohanan (1985) の適用領域指定の原則に従いこれらの規則は層5において適用されると仮定する。さらに(14)の例は②6が随意的に適用されることを示唆している。

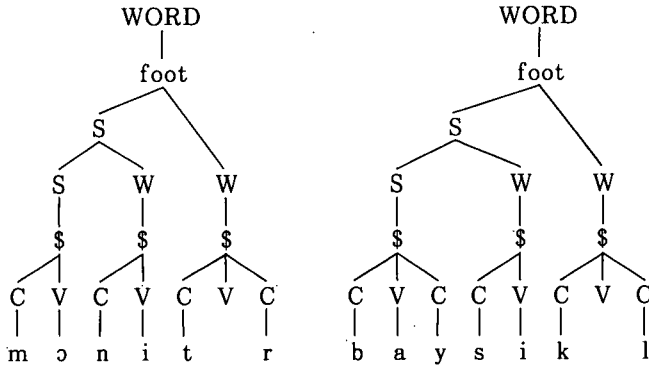
3. -ing 形の語とその他のタイプの語の発音上の異形の派生について

この節では1節と2節において提案した規則との関係から、-ing形とその他のタイプの語の発音上の異形に関する事実、すなわち、(3)、(5)、(6c,d)に挙げたような-ing形の語では例外を容れないように発音上の異形が存在し、他方(6a,b)でみたように-ous, -able等々の形のその他のタイプの語では単語毎に振舞いが異なるという事実がどのように説明されるべきかについて考察する。最初に-ing形の語の典型的な例として monitoring と bicycling をとりあげて検討してみる。¹¹⁾

②7 層1：韻脚形成

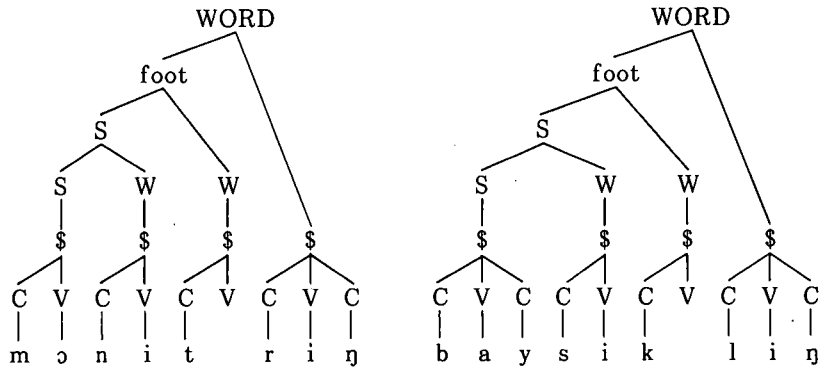


層2 : V要素挿入

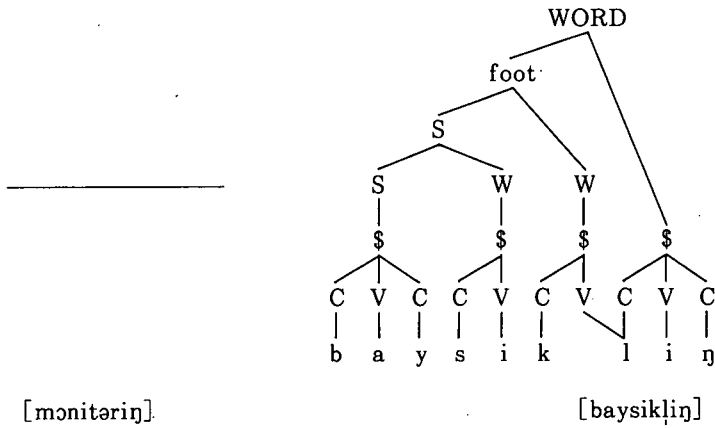


層3 : —

層4 : -ing 接辞付加



層5 : V要素削除規則 (構造記述に合致せず)、連結規則 (monitoringでは構造記述は満たされない)

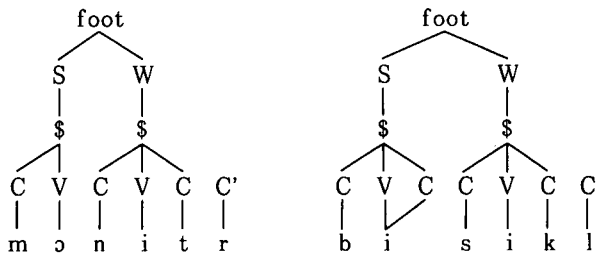


②)では層1において韻脚形成が行われ、そして、層2ではV要素挿入が行われる。さらに、層4で

は-ingの接辞付加が行われるが、層5ではV要素の削除は行われない。このような構造に(18)の連結規則が適用された場合、その monitoring の派生においては-ing形の左側にある/rは音節のオンセットにあるため、末尾の音節とその左側の音節とに跨がる対応線は引かれませんが、他方、bicyclingの場合にはその構造記述が満たされるため、-ingの左側の/l/は(17)に示してあるようにその両側の音節に跨がった対応線を持つことになる。¹²⁾

このような規則の体系を仮定した場合には、しかしながら、(3)(5)および(6c,d)の-ing形の語に関して得られる出力は(17)のように派生される一つの発音のタイプだけである。次にこれらの-ing形の語の発音上の異形の派生について考え、その可能性を探る。本論の分析の枠組みの下では、問題の焦点は monitoring と bicycling の派生において、monitor- と bicycle- の末尾の共鳴音の左側にV要素が挿入されずに屈折接辞-ingが添加されるというような派生はいかにして行われるかという事にしぼられる。まず最初に再分節は層4に限定されて行われる場合もあると仮定することも可能であるように思われる。というのも Mohanan (1986) は doubling 等の発音上の異形(ここでも-ingの左隣の/l/の音節主音性が問題となっている)の考察において類似する機能を持つ共鳴音再分節化(sonorant resyllabification)を設定し、その適用領域を層4と指定している(同書のp. 34参照)からである。この場合、V要素挿入規則は層2ではなく、層4あるいは層5において適用されなければならない。V要素挿入規則が層5において適用される場合、次のような派生が得られる。

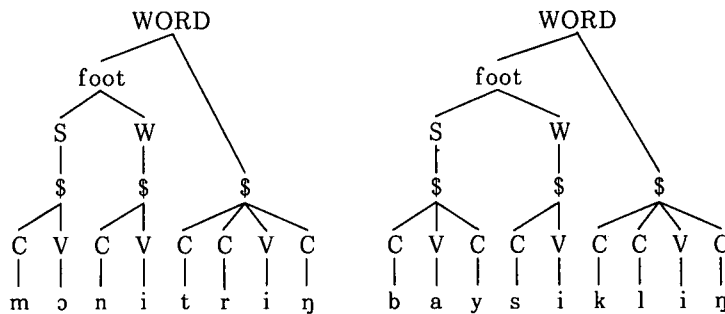
(28) 層1 : 韻脚形成



層2 : —

層3 : —

層4 : -ing 屈折接辞付加



層5 : V要素挿入規則、V要素削除規則、連結規則(いずれも、構造記述に合致せず)

[mɔnitriŋ]

[baysikliŋ]

⑳とは異なって、V要素挿入規則の適用領域を層4に指定しても、同じ出力は得られる。しかし、V要素挿入規則を層5に指定する事に対して積極的な反例となるような例はKenyon & Knott (1944)には見出されないため、本論では㉑の派生を引き続き仮定していく。¹²⁾

本論の仮定に対する、一見可能と思われる代案がMohanani (1986)により提案されている。屈折接辞-ingの左隣の位置で共鳴音が音節主音的でもありえ、さらに非音節主音的でもありうるような一連の語群が存在することを次の規則で説明しようとする。

㉑ (=Mohanani (1986) の(44) 共鳴音再分節化 (適用領域: 層4、随意的)

$$V \rightarrow C / \left[\begin{array}{c} \text{---} \\ \text{---} \end{array} \right] V \\ [+cons]$$

屈折接辞-ingが付加される層4において共鳴音の再分節化が行われるというMohanani (1986)の仮定は、この接辞を持つ語において例外なく音節主音性の随意性が観察されるという事実によって裏付けられるかもしれない。しかしながら、㉑の規則の構造変化の指定に際して、子音的共鳴音のみが音節のV(音節の頂点)を占める場合があるということが前提とされており、この方法はひとつの重大な短所をかかえている。すなわち、この方法は形態論的な区切れ(ここでは屈折接辞-ingと語基の間)がある場合には適切に語基の末尾の共鳴音の音節主音性の随意性を説明しえたとしても、なんらそのような形態論的な区切れを持たず、かつ、母音の左側に隣接する位置においても共鳴音が音節主音として生ずるという事実を説明することができないのである。(30はそのような現象が見出される例であり、その斜字体の共鳴音が音節主音の位置を占めている。

(30) hypotenuse, Chesaning, antelope, Italy, Catalan

さらに、㉑を(31)のように改訂し本論の分析の枠組みの中に組み入れることも可能のように思われるけれども、

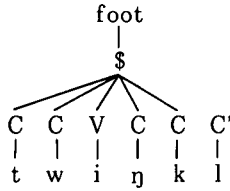
(31) 共鳴音再分節化 (適用領域: 層4、随意的)

$$\begin{array}{ccc} & \$ & \$ \\ & | & / \\ C' & V & C & V \end{array}$$

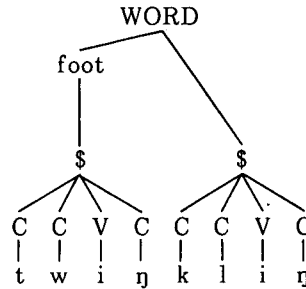
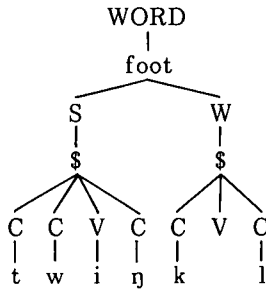
(31)の効果は本論において仮定している、より一般的な再分節化規約の一つの特殊な場合にすぎず、(31)を本論の枠組みの中に組み入れることは、ただ文法全体の簡潔さを損うのみである。したがって本論では㉑(31)を含む代案は採用しない。

再び具体例の検討を続けることにする。㉑のような派生を仮定した場合、既にSPEの中で指摘されているtwinklingという語の分詞と名詞の発音における音節の数の違いをも合わせて無理なく(32)のように派生することが可能である。(32)の派生例はV要素挿入規則が層2において適用される場合である。ここでは名詞形を派生する接辞の-ingは、Mohanani (1982)の示唆に従い、層2において付加されると仮定する。

(32) 層1 韻脚形成

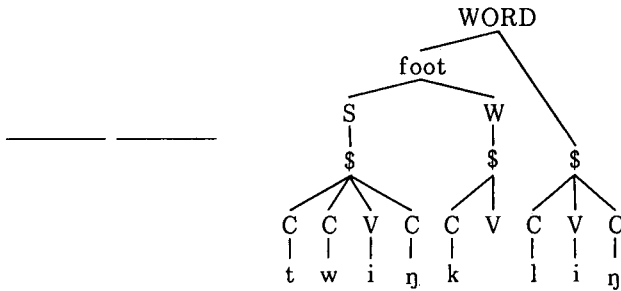


層2 -ing接辞付加、V要素挿入規則

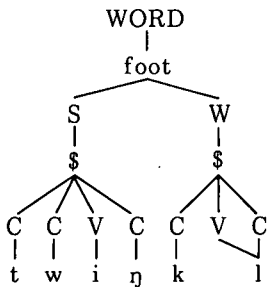


層3 —

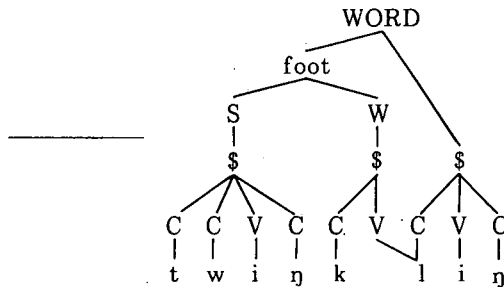
層4 -ing接辞付加



層5 V要素削除規則 (構造記述は満たされない) 連結規則



[twɪŋkɪ]



[twɪŋkɪŋ]
(『瞬間』)

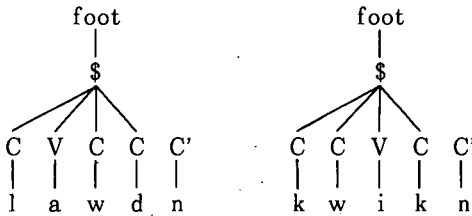
[twɪŋkɪŋ]

twinkle と分詞形の twinkling の場合には /l/ は二つの CV 要素に跨がる対応線を持つことになるが、

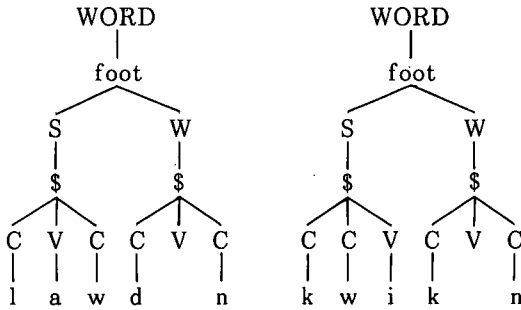
名詞形の twinkling (『瞬間』) の場合には新たに対応線は引かれない。

さらに(5)に挙げた -ing 形の語の発音上の異形は、たとえば(33)と(34)のように、これまでに提案してきた規則の構造記述と適用領域の指定等に関する仮定を変更させることなく派生することができる。

33 層1 韻脚形成

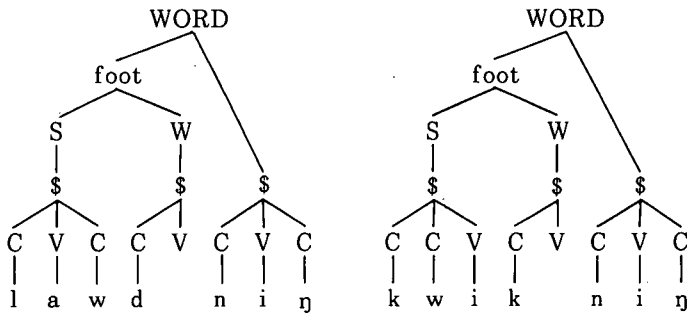


層2 V要素挿入規則



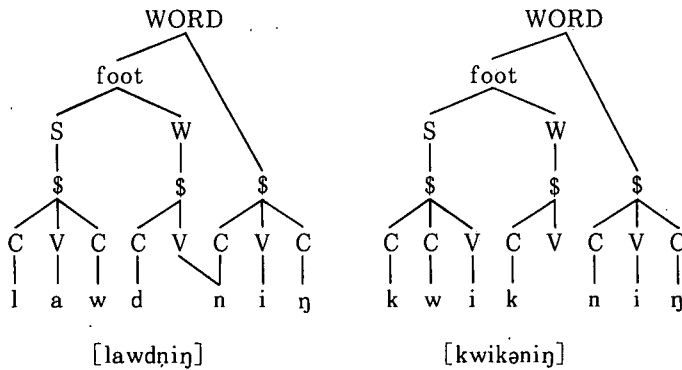
層3 —

層4 -ing 接辞付加



層5 V要素削除規則 (構造記述は満たされない)

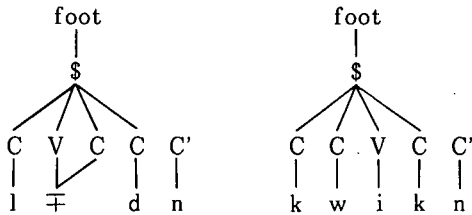
連結規則



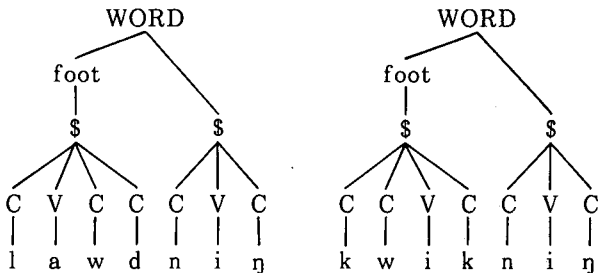
(33)のようにV要素挿入が層2において行われる場合には層5の派生の段階において共鳴音の/n/が-ingの左側の音節のV要素に結び付けられる可能性が生ずる。この場合、(13)において指摘したとおり、/d/は/n/の音節主音化を許容するが、/k/の場合には/n/の音節主音化を許容しない。loudeningの場合には/n/がその両側の音節に結び付けられることになるが、quickenigにおいてはこのような対応線は結ばれず、したがって、この場合には弱化母音がその/n/の左隣に具現することになる。

また(34)のようにV要素挿入規則が層5において適用される場合には連結規則(8)の構造記述を満たす音の連鎖は生じないので、その両方の例において共鳴音の/n/の音節主音化も弱化母音の具現化も観察されないということになる。

34 層1 韻脚形成



- 層2 —
- 層3 —
- 層4 -ing 接辞付加



層5 V要素挿入規則、V要素削除規則連結規則 (いずれの規則の構造記述も満たされない)

[lawdnɪŋ]

[kwɪknɪŋ]

以上の考察を要約すると、このようにして、共鳴音の音節主音化の段階と弱化母音の脱落とを以上のような方法で区別し、さらに、V要素挿入規則、V要素削除規則および連結規則とそれらの順序づけとを仮定するならば、第1に、-ing形の語においては、他のタイプの語とは異なってその弱化母音の脱落と共鳴音の音節主音化の可能性が極めて、首尾一貫したものであるということ、そしてまた第2に語末の音節での共鳴音の音節主音化の可能性は音節においても同様に成り立つという点がより自然に説明される。Kenyon & Knott (1944)の指摘によれば、blazoning等の-ing形の語の音節の数の随意性は文体に依存するものである。したがって、本論では、文体に依存して、V要素挿入規則および再分節化の適用領域は変更されると仮定しておく。

つぎに-ing形の語以外の語の派生について検討する。本論の展開のため、その前にこれまでの説明方法についてまとめておくことにする。本論ではこれまでに以下のような規則、規約等を仮定してきた。

(35) a. 音韻規則の層順序づけ

層1 韻脚形成

層2 V要素挿入規則 (文体A)

層3 —

層4 —

層5 V要素挿入規則 (文体B)

V要素削除規則

連結規則

b. 規約

漂遊音節接合

再分節化規約

i. 文体A: すべての層において機能する

ii. 文体B: 層4に限定される

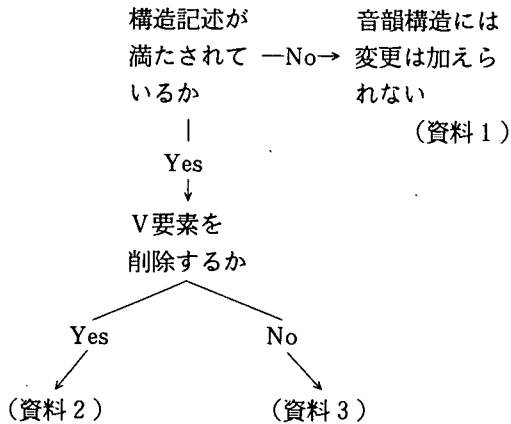
c. 原則

適用領域指定の原則

以下では、(35)の仮定に基づき-ing形以外の例について検討する。とりわけ、V要素削除規則の随意的な適用を仮定することにより、どのようにそれらの語の発音上の異形の可能性が説明されるのかを具体的に示していく。

V要素削除規則の随意的な適用は、流れ図を使って図示すると、以下のような展開を経ることになる。

(36) V要素削除規則 (随意的)



資料は第1に規則の構造記述を満たすか否か、さらに第2に規則の構造記述を満たす場合に規則の適用により該当するV要素が削除されるか否か、によって上の図のように3通りに分けて考えることができる。これらの3通りのタイプの資料の具体例は以下のようなものである。

(37) a. 資料 1

pathologic, patentee
[pæθələdʒɪk] [peɪtnti:]

b. 資料 2

monopoly, catholic, laudanum, monotony
[mə'nɒplɪ] [kæθəlɪk] [lə:dnəm] [mə'nɒtnɪ]

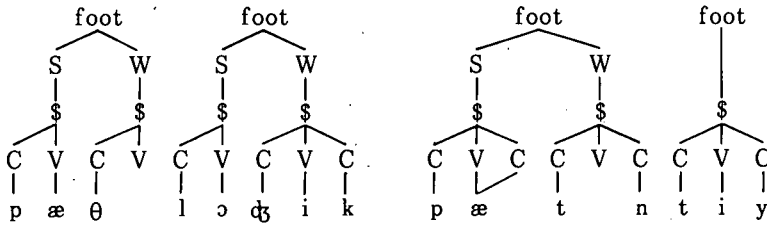
c. 資料 3

monopoly, catholic, laudanum, monotony
[mə'nɒplɪ] [kæθəlɪk] [lə:dnəm] [mə'nɒtnɪ]

一見、混み合っているように見えるこれらの例は本論の仮定の下ではより自然に説明することが可能である。(37a, c) の pathologic, catholic では共鳴音の /l/ の音節主音化は起こらず、弱化母音はその該当する位置に現れ、同じく (37a, c) の patentee, monopoly, laudanum, monotony では語中の共鳴音 /n/ と /l/ は音節主音となり、その該当する位置には弱化母音は現れない。また (37b) では語中の共鳴音 (monopoly, catholic の /l/ と laudanum, monotony の /n/) の音節主音化は起こらず、またこれらの共鳴音の左側には弱化母音は現れない。以下では順を追って、派生の過程を示していく。

最初に pathologic と patentee の派生過程を検討する。派生は(36) のように行われる。

(38) 層1 韻脚形成



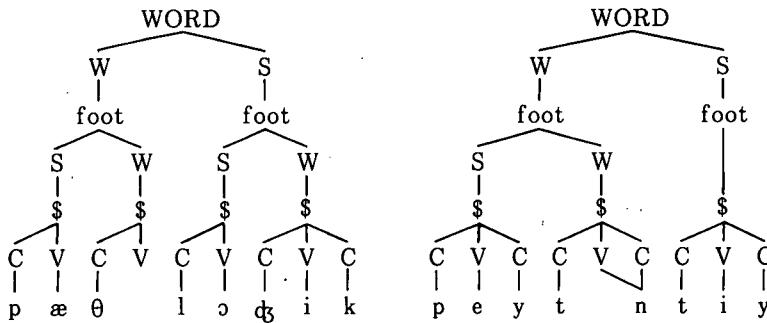
層2 V要素挿入規則 (構造記述は満たされない)

層3 —

層4 —

層5 V要素削除規則 (構造記述は満たされない)

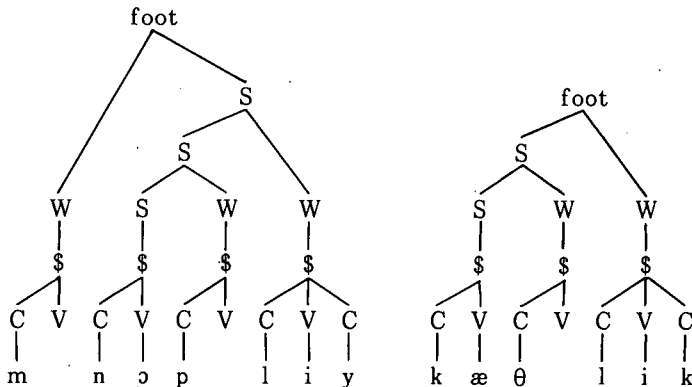
連結規則 (pathologicにおいては構造記述は満たされない)

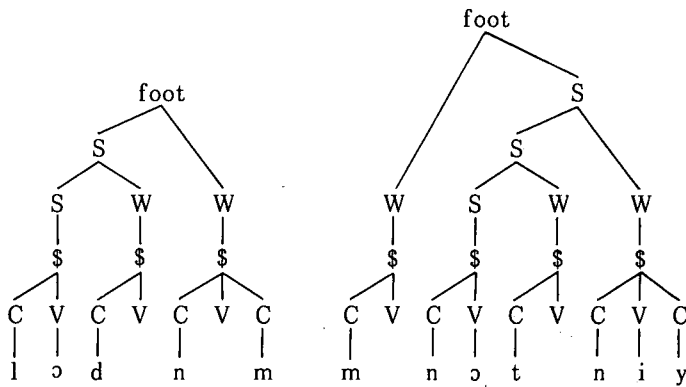


ここでは層1において、それぞれの語に二つの韻脚が付与される。層5の段階になり、V要素削除規則が適用されようとする時にはその構造記述は満たされず、したがって、空のV要素が残ったまままで連結規則の適用の段階に入る。pathologicの場合には新たな対応線は引かれませんが patentee の場合には /n/ は CV レベルの二つの要素に結び付けられる。

つぎに、monopoly, catholic, laudanum, monotony の派生について検討する。これらの語の層1での音韻構造は以下のようなものである。

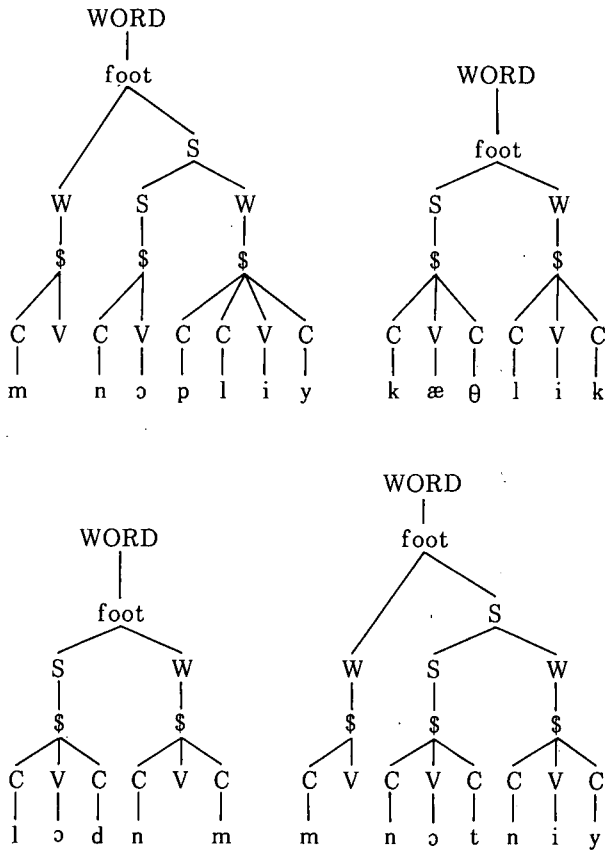
(39) 層1 韻脚形成





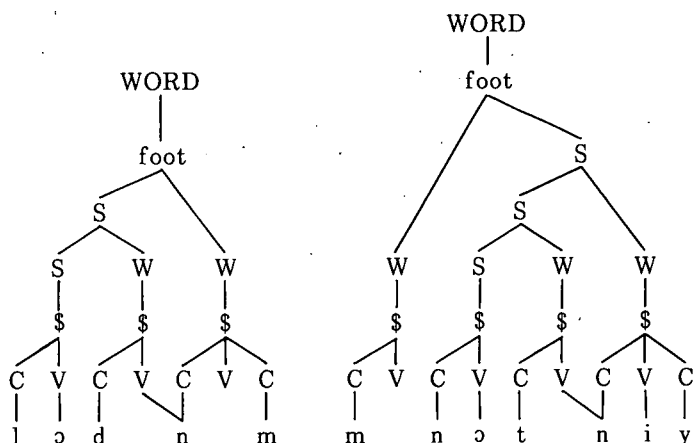
これらの例はいずれもがV要素削除規則の構造記述を満たしている。したがって、末尾から2番目の音節のV要素が随意的に削除されることになる。層5においてそのV要素が削除された場合には以下のような音韻構造が派生される。

(40) 層5 (V要素削除規則の適用を受けた後の構造)



このような場合には、連結規則によって新たな対応線が引かれることはない。他方、その該当のV要素が削除されないうままに残る場合には、新たな対応線が引かれる可能性がある。(39の *laudanum* と *monotony* はそのような例であり、(41)のように連結規則により新たな対応線が引かれる。

(41)



このようにして、Kiparsky (1977) が提示している例の弱化母音の削除の現象のみならず、その弱化母音を含むような方法で起こっていると思われる、共鳴音の音節主音化の可能性をも説明することが可能である。

4. まとめ

本論では以下のような点を主張してきた。第1に、-ing形の語においては極めて首尾一貫したかたちで、特定の音声的環境の下にある弱化母音の具現、非具現および共鳴音の随意的な音節主音化が認められるけれども、他方それ以外のタイプの語においてはこれらの現象はより散発的であるということ、第2に、弱化母音の削除の現象は、母音的な要素（ここではV要素）の削除を行う装置とともに、厳しく制限された音韻的条件の下でそのようなV要素を挿入する装置を認めることにより、より自然な説明が与えられるということである。

本論では以下の点についてはたちいて考察しなかった。第1に、そのメロディーが空のV要素の音韻的な解釈、即ち、メロディーの充当の過程については詳細には述べなかった。この点は Archangeli (1984) の中で提案されている音声素性と余剰規則に関する理論を、現代英語の音韻論に適用し考察する必要がある。第2に、連結規則の構造記述を(18)のままにとどめ、*phlogiston* および *badminton* において語末の/n/が非音節主音的であるという事実、また *assimilate* において /l/ の音節主音化が起こっているにもかかわらず *dissimilate* においては /l/ の音節主音化は観察されないということ、を包括しうる規則の精密化を行わなかった。この点は、空のV要素を狭んで同器音的な子音と共鳴音とが並ぶと、なぜその共鳴音が音節主音化されるかという一般的な事実とあわせ、Shared Feature Convention の具体的な適用の考察により明らかにされるものと思われる。¹⁰⁾

*本論は日本英語学会第4回大会での口頭発表に際しての草稿に加筆、修正を行ったものである。本論をまとめるにあたり、高知大学の島新先生および宮崎大学の武方壮一先生より貴重な御助言をいただいた。

日本英語学会での口頭発表に際しても聴衆の方々から有益な御助言をいただいた。心より感謝申し上げる。また、佃雄次君、五百蔵高浩君そして森田昌吾君は本論の詳細な点に互り議論の相手となってくれた。ここに記して感謝の意を表したい。しかし、いたらぬ点は全て未熟な筆者の責任である。

注

1. 本論では考察の対象とする資料を、主に、Kenyon & Knott (1944) に限定している。それは以下のような理由による。第1は、等質的な資料を広範に集めるため、という理由である。たとえば Kiparsky (1977) は、asterisk という語の第2音節の弱化母音は脱落可能であるとみなしているが、Kenyon & Knott (1944) では [astrisk] という項目はない。第2は、本論は Halle & Mohanan (1985) と基本的に同一の枠の中で作業をすすめるため、資料もまた同一のものにする必要がある、という理由である。Halle & Mohanan (1985) は、Kenyon & Knott (1944) からアメリカ英語の資料を引用している。また本論では Halle & Mohanan (1985) の発音記号の体系を用いる。表記の簡潔さのため、強勢記号は省き、小型かしら文字の *i* の代わりに小文字の *i* を用いる。弱化母音削除の現象を、基本的に Chomsky & Halle (1968) (=SPE) の理論的枠組みを踏襲して行った研究もあり、その中には Guile (1972), Selkirk (1972), Zwicky (1972) がある。しかしここでは、分節音よりも大きな音韻上の単位、たとえば音節という単位は分析上の重要な役割は果してはいない。
2. Kiparsky (1977) が設定している規則(2)は「無強勢母音」を削除する規則である。本論の考察においては、弱化母音（あるいは縮小母音）と無強勢母音との間の理論的な相違を Kiparsky (1977) とは別の方法で捉えているけれども、Kenyon & Knott (1944) からの資料の分類（すなわち、どの語において母音の削除が行われるか、に関しての分類）においては、これらの二つの分析方法が重要な違いを生むことはないと思われる。本論では、Halle & Mohanan (1985) と同じように、母音弱化（あるいは母音縮小）は分節音のレベルのメロディーの削除の過程であり、後の段階で該当する位置に弱化母音のメロディーが挿入される、と仮定する。
3. Hooper (1978) は「強さの階層」(strength hierarchy) に基づいて、強勢の右側の位置での弱化母音の削除の可能性を説明しようとしている。しかしながら、彼女の説明方法では、なぜ -ing 形の語では弱化母音の脱落が極めて首尾一貫して起こり、また、なぜそれ以外のタイプの語では (6a, b) に示したように不安定なのかを説明することは、特別な手立てを設けない限り、できないと思われる。
4. Gimson (1962) では、イギリス英語においてもまた(7)のような音声的交替が認められるということが指摘されている（同書 p. 53参照）。したがって、「弱化母音+共鳴音」という連鎖と「音節主音的共鳴音」との間の文体の違いに依存する交替は、より一般的な意義を持った現象であると推測してもよいかもしれない。
5. ただし phlogiston, badminton 等では語末の位置での /n/ の音節主音化は観察されない。また assimilate では /l/ の音節主音化が認められるが、dissimilate では /l/ の音節主音化は認められない。したがって (8) の連結規則の適用の義務性をより広範な資料により検討する必要がある。しかし、本論でその資料を採取している Kenyon & Knott (1944) の例からは今のところ納得のゆく説明を導びくのは困難であるように思われる。
6. 本論では音節主音としての /r/ は、音声的には、かぎ付きシューワとして現れていると考え、/ʌ/ の記号を使用して表示する。しかし、これは特別な仮定ではない。このような取り扱いについては Bloomfield (1933) の pp. 118-22, Donnegan & Stampe (1979), Clements & Keyser (1983) を参照。
7. Kenyon (1956) と Chao (1957) においても、その音声的環境との関係において共鳴音の音節主音化の可能性が考察されている。また、本論では、Kenyon & Knott (1944) からの資料が極めて少ないため /m, n/ の音節主音化は扱わないことにする。
8. ここでは英語においては共鳴音の /r, l, n/ は単独でも語中で音節のライムを構成しうるとみなす。この仮定は Kenyon & Knott (1944) の指摘による。
9. 複合語の第1要素の末尾に /r, l/ が生じ、さらに第2要素が母音ではじまる場合にも、その /r, l/ は音節主音となりうる（桑原など (1985), p. 482）。このような場合にも /r/ は音節のライムにあると仮定しなくてはならない。この点については、後で検討する。

10. 例は Shockey (1973) が提出している広範な資料からの引用である。
11. ここでは SPE にしたがって、quicken, louden 等の語にみられる動詞形成接尾辞の -en は音韻的に /n/ と表示すべきであると考えられる。
12. (3)と(4)に挙げた語から -ing 形を除去して得られる動詞の語強勢に関する情報は次のような音韻的余剰規則により補充されると仮定することにする。
- (i) 語強勢に関する音韻的余剰規則
 ゼロ派生の対となっている語彙エントリーがある場合、一方の韻脚構造の情報をその対となっているものへコピーせよ。
- ここではゼロ派生の対とみなされる paint, bicycle, drive, punch (いずれも名詞と動詞の対) のような語彙項目は Lieber (1981) が提案するような方法によって辞書に記載されていると仮定することにする。なお、語強勢に関する余剰規則はこのような例に関してのみ必要な、特殊なものではない。Siegel (1974) は Halle (1973) の複合語強勢規則 (compound stress rule) に対して次のような余剰規則が課されるべきであることを認めている。
- (ii) All verbs of the form [# ... [Z]_s #]_v are subject to the environment — Q of the CSR.
- ここで CSR=compound stress rule
- Halle & Mohanan (1985) の枠組みにおいても、Word Tree Construction に対して (ii) の働きを持つ余剰規則を設ける必要がある。
13. さらに、V要素挿入規則が層5において適用される場合にも、afterimage と aftereffect の間の /r/ の音節主音性の違いは適切に派生することが可能である。
14. この規約の詳細は Steriade (1982)、とりわけ Sagey (1986) の pp. 236-37 を参照。

References

- Archangeli, D. (1984) *Underspecification in Yawelmani Phonology*. MIT. Doctoral Dissertation.
- Bloomfield, L. (1933) *Language*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Chao, Y.-R. (1957) "The Non-uniqueness of Phonemic Solutions of Phonetic Systems." In M. Joos (ed.), pp. 38-54.
- Clements, G.N. and S.J. Keyser (1981) "A Three Tiered Theory of the Syllable." Occasional Paper #19. MIT.
- Clements, G.N. and S.J. Keyser (1983) *CV Phonology: A generative theory of the syllable*. The MIT Press.
- Chomsky, N. and M. Halle (1968) *The Sound Pattern of English*. (=SPE) New York: Harper & Row.
- Dinnsen, D. (1979) *Current Approaches to Phonological Theory*. Bloomington and London: Indiana University Press.
- Donnegan, P.J. and D. Stampe (1979) "The Study of Natural Phonology." In D.A. Dinnsen (ed.), pp. 126-73.
- Fisiak, J. (1978) *Recent Development in Historical Phonology*. The Hague: Mouton.
- Gimson, A.C. (1962) *An Introduction to the Pronunciation of English*. London: Edward Arnold Publishers, Ltd.
- Guile, T. (1972) "A Generalization about Epenthesis and Syncope." *Papers from the Regional Meeting, Chicago Linguistic Society* 8, pp. 463-69.
- Halle, M. (1973) "Stress Rules in English: A new version." *Linguistic Inquiry*, vol.4, pp. 451-64.
- Halle, M. and G.N. Clements (1983) *Problem Book in Phonology: A workbook for introductory courses in linguistics and modern phonology*. The MIT Press.
- Halle, M. and K.P. Mohanan (1985) "Segmental Phonology of Modern English." *Linguistic Inquiry*, vol.16, pp. 57-116.
- Hayes, B.P. (1982) "Extrametricity and English Stress." *Linguistic Inquiry*, vol. 13, pp. 227-76.

- Hooper, J.B. (1978) "Constraints on Schwa Deletion in American English." In Fisiak (ed.), pp. 183-207.
- Joos, M. (1957) *Readings in Linguistics: The development of descriptive linguistics in America since 1925*. Washington: American Council of Learned Societies.
- Kenyon, E.M. (1956) *American Pronunciation*. Tenth edition. Ann Arbor, Michigan: George Wahr Publishing Company.
- Kenyon, E.M. and T.A. Knott (1944) *A Pronouncing Dictionary of American English*. Springfield, Massachusetts: Merriam.
- Kiparsky, P. (1977) "The Rhythmic Structure of English Verse." *Linguistic Inquiry*, vol. 8, pp. 189-247.
- Kuwahara, T., Y. Takahashi, H. Onozuka, A. Mizokoshi and T. Oishi (1985) *On'inron*. Tokyo: Kenkyusha.
- Lieber, R. (1981) "Conversion within a Restricted Theory of the Lexicon." In H. van der Hulst and N. Smith (eds.), pp. 161-200.
- Mohanan, K.P. (1982) *Lexical Phonology*. Doctoral Dissertation. MIT.
- Mohanan, K.P. (1986) *The Theory of Lexical Phonology*. Dordrecht: D. Reidel Publishing Company.
- Sagey, E. (1986) *The Representation of Features and Relations in Non-linear Phonology*. Doctoral Dissertation. MIT.
- Selkirk, E.O. (1972) *The Phrase Phonology of English and French*. Doctoral Dissertation. MIT.
- Shockey, L. (1973) "Phonetic and Phonological Properties of Connected Speech." *Working Papers in Linguistics*. vol. 17, pp. iv-143.
- Siegel, D. (1974) *Topics in English Morphology*. Doctoral Dissertation. MIT.
- Steriade, D. (1982) *Greek Prosodies and the Nature of Syllabification*. Doctoral Dissertation. MIT.
- Stockwell, P.P. and R.K.S. Macaulay (1972) *Linguistic Change and Generative Theory*. Bloomington: Indiana University Press.
- van der Hulst, H. and N. Smith (1981) *Lexical Grammar*. Holland: Foris Publications.
- Zwicky, A. (1972) "A Note on a Phonological Hierarchy." In Stockwell and Macaulay (eds.), pp. 275-301.

(昭和62年9月26日受理)

(昭和62年12月28日発行)